

一方、チェンマイ県の隣のバヤオ県のドークカムターイでは、全く違った学校の光景に出会いました。学校や校庭が広い代わりに、親たちの身なりはぐっと貧相になり、親の手伝いで普通に学校に通うことさえ、まだまだかなわない子がいました。また両親が出稼ぎでHIVに感染、すでに死亡していて祖父母や親戚に育てられている子供が多いのが現状です。実際私が担当している子供もおばあちゃんに育てられており、両親は幼い時に他界しています。3年間文通をし続け、やっと会えたにもかかわらず、彼女は私を見て笑いませんでした。ちょっとはにかんだような表情はするのですが、笑い方を忘れてしまっているのです。おばあちゃんは内職でその子を育てていますが、目が悪く手はしわしわで、苦勞していることが一目で分かりました。

私は、子供達全員と握手をし、抱き締めてきました。中には汚れきった服を着ている子、病氣や障害を持った子、明らかに栄養失調の子供もいました。体は全体的に小さめで、日本の子供達に比べて体力がない事がよくわかりました。宗教心に支えられながら、先生も親も親戚も、必死で子供を育てている様子が良く分かります。

しかし冷静に見てみると、出稼ぎと言う方法が、さまざまな社会問題を引き起こしているように見えました。病氣や育児放棄も多く、また仕送りで作った立派な家もありますが空家が目立っています。高床式の家にはテレビや冷蔵庫が並び、バイクや車も目にしましたが、借金地獄に陥ってしまうという話も聞きました。

最近では、私たちのような民間からの海外支援も入り込んできているようですが、どこまで有効にお金が使われているのかは疑わしい面もあります。本来はお金ではなく、地元での産業開発、雇用拡大をすることが早急に問われています。が実際には行政はそれほど機能していません。その点、学校というものが拠点となって、教育を子供達に受けさせ、リーダーとなる人間を育てることが先決なのです。

倫理観と言うものは、仏教が根底にあるために養われているのは事実ですが、貧しさや教養のなさゆえに、近代文化が流入した事も加わって、お金や性に対する倫理観が失われています。また貧富の差が激しく、政治不正も絶えないようです。

この旅は私が想像していたものとは全く違っていました。最初は支援している子供達に会えてきっと嬉しいだろうと思っていたのです。確かに嬉しかったのですが、私自身は、一つの国の歴史、行政のあり方、教育のあり方、宗教、倫理観まで踏み込んで、様々な事を考えさせられました。タイの人々のほほえみの裏には、深い悲しみや諦めが見えかくれていました。美しい国タイをどうすれば美しいままに残し、心の美しい人間を育て、心豊かな国にできるのか。。。日本から年間1万2千円を支援する、たったそれだけのつながりが、私というちっぽけな人間に、大きな課題を与えてくれたような気がして、今は気持ちが沈んでいます。

さて、日本に帰国し、その足でわが子を保育園と児童センターに迎えに行きました。建物や服そうには違いがありましたが、やはり子供達の笑う姿はどちらの国も変わらない事が良く分かりました。ただ支援しているタイの子供達の行く末を考えると胸がチクリと痛みます。どんな世にあっても自分達で生き抜く力をどうすれば教育していけるのでしょうか。将来は国境を越え、この子たちが手をたずさえて、幸せで平和な世の中を作ってくれる事を心の底で祈りつつ、今はただ淡々と自分の始めた事の意味を考えながら、自分にできる事をやっへ行こうと思っています。そして人の幸せと言うものは何か、もう一度振り返って考えてみたいと思います。

最後に、参加者の皆さん、協力者の皆さん、人生において、忘れられない旅をさせていただき本当にありがとうございました。



ドークカムターイの両親をHIVでなくしている子供と。